

美しい最上川ステップアップ・クリーン作戦

美しい山形・最上川フォーラム

はじめに

美しい最上川・山形づくりの取り組みは、県民をはじめ、NPOなどの活動団体、事業者、大学等の学術機関及び行政機関などが連携・協力し、それぞれがその役割を担いながら進めていくことが大切である。

設立宣言に掲げた趣旨を実現していくためには、県民をはじめ、NPOなどの各種団体、事業者、大学等の学術機関及び行政機関などが、それぞれに役割を担いつつ連携・協力し合って活動していくこと大切である。

そこで、「美しい山形・最上川フォーラム」は、本県の自然を代表する最上川を美しい県土づくり運動のシンボルに掲げ、関係する様々な方々が集い、話し合い、連携・協力していくための母体として、平成13年7月26日に発足した。

活動の柱、目標

- (1) 美しく豊かで健全な水環境を守り育てる
- (2) 川に育まれた地域文化を理解し活かす
- (3) 最上川を地域経済の活性化に活用する

この実現に向け、平成14年7月、「美しい山形・最上川100年プラン」を策定し、このプランのもと、美しい山形づくり活動を進めている。

地域の水の水質を地域の方に調べてもらう「身近な川や水辺の健康診断」を2002年から、散乱ゴミの実態を知るための「クリーンアップ・キャンペーン」を2003年から行っている。「身近な水辺の健康診断」では地域の川や用水路の現状を、水質簡易調査キットを使い県民自らの手で調査。「クリーンアップ・キャンペーン」では県内の河川環境の改善に向け、どこにどんな種類のゴミがあるかを知ってもらうこととした。また「水辺の健康診

断」においては、活動のさらなる広がりや充実を期待して、調査を継続して参加するとともにこの活動を通じた具体的な環境向上へ向けた活動などを実施している参加団体を表彰している。さらに、これらを踏まえたゴミ発生源対策を実施中である。

目的

「身近な川や水辺の健康診断」「クリーンアップ・キャンペーン」は、県内の河川環境の改善に向け、活動の核となる人材を育てつつ、誰もが気軽に参加できる形で河川の水質調査と身近なゴミの回収活動を実践。子供から高齢者まで幅広い層が参加することを通じ、県民全体の河川環境に関する問題意識や関心を高め、意識改革を促し、水質浄化に向けた実践活動を拡大することも狙っている。どちらも継続して行ってもらうことで、データを蓄積・公表し、どのような変動があるかを感じてもらっている。しかし、モニタリングしゴミを拾っても、捨てる源に切り込まなければゴミ問題は解決しないため、「ゴミ削減のモデルケース」とした地域を設定し、各団体に水質調査とゴミ拾いを定点調査してもらい共に現状把握し、成果報告を行うなどしてゴミ発生源対策と美化運動の促進を図る。県内の多様な主体の自主的な協働及び連携により、ゴミを捨てない社会と、母なる川「最上川」をゴミの無いきれいな川にすることを目標としている。

内容

1 身近な川と水辺の健康診断（以下水質調査）

地域の方々の「身近な水の水質を知りたい」という声を受け「水辺の健康診断」を開始。調査内容を、①簡易水質検査器材6項目（pH（酸性度）、COD、アンモニウム性窒素、亜硝酸性窒素、硝酸性窒素、りん酸性りん）、②透視時計（1m）による透視度調査、③簡易な水辺環境（ごみや動植物な

どの状況)の確認、④水生生物調査(希望団体のみ)とし、取りまとめる。「水の濁り」や「富栄養化」(窒素・リン)の調査、魚や動植物などを指標にした「誰にでもわかりやすい清流指標」を検討している。

参加者の皆さんから寄せられた調査結果を地図上にまとめることにより、一目で流域全体の状況把握が可能になり、水系間や上下流地域間で情報が共有され、ネットワークづくりのきっかけとなることが期待される。21年の参加グループは80グループ、人数は1,055人。

【レーダーチャート】

凡例



水辺の健康診断 レーダーチャート



水辺の健康診断 山形十中PC部



水辺の健康診断 山形十中PC部2

2 美しいやまがたクリーンアップ・キャンペーン (以下クリーンアップ活動)

ただゴミを拾うだけでなくどんな種類があるかデータカードに記入してもらっている。「どんなごみがどれくらいあるのか」を知り、「発生源はどこか」を考え、「ゴミを出さないための行動や社会づくり」に結びつけるための環境保全活動で、県内のデータは、一覧表と地域別にゴミの種類・量・割合に分け、各地域の結果を確認できるようになっている。国内の結果は海岸・河川に限らず地区内全体への取り組みを呼びかけている。内陸部で取り組まれたクリーンアップ活動の結果を含めて、クリーンアップ全国事務局が毎年『クリーンアップキャンペーン・レポート』にまとめており、散乱ゴミ削減のための資料として官公庁・企業への提示、提言の拠りどころとなっている。集めたデータをアメリカの海洋環境団体/オーシャン・コンサンバンシーに送り、国際海岸クリーンアップの結果としてまとめられている。

21年度の参加グループは50グループ、人数は1,700人に上った。



クリーンアップの様子 中の川中流愛護会



クリーンアップの様子 商工会



クリーンアップの様子 岡崎医療（株）鶴岡営業所

3 ゴミ発生源対策「捨てない・すてさせないin最上川」（以下ゴミ発生源対策）

1, 2を踏まえたゴミ発生源対策を実施中。

大量のゴミが蓄積するダム付近上流地域3市6町をゴミ削減のモデル地区とし、

①上記1, 2に参加し、各市町で場所や調査団体をセッティングしてもらい、定点調査を行い現状把握する。

②画一的な取組みを行うのではなく、やりやすかつ実施できるプロジェクトを提案。

③成果報告を行うなどのサミットを実施する。

といった取組みを行っていく。

河川に散乱するゴミの大半は家庭から出るゴミが占めており、単に景観を損ねるだけでなく、海洋汚染や生態系への悪影響を及ぼす重大な環境問題にもなっている。ごみを減らし捨てさせない県民の意識改革と社会の仕組みづくりを目指し、全県下を対象にした水辺の散乱ゴミの調査回収活動を実施し、また、当該活動の拡大方策を検討する必要がある。身近なところから取り組むべきこれらの内容は、今日的な展開が重要である。

ゴミ発生源対策「捨てない・すてさせないin最上川」

フォーラムでは今までに、水辺の検討診断やクリーンアップキャンペーンなどを行ってまいりました。しかし、“ゴミを拾う”という取り組みは広がってきているものの、“ゴミを捨てない”という発生源に切り込むことが必要だと考え、このゴミ発生源対策「捨てない・すてさせないin最上川」をスタートさせました。朝日町上郷ダム上流域の9市町（朝日町・飯豊町・大江町・川西町・白鷹町・高畠町・長井市・南陽市・米沢市 以上五十音順）をモデル地区とし、民間・住民に自発的にゴミを減らす対策を自由に提案・実施していただき、また、フォーラムの取り組みにも参加してもらい、全国に発信していきたいと考えております。

第1回検討会および上郷ダム見学会（11月24日実施）の主な参加者…朝日町長、飯豊町長、川西町長、白鷹町長、各市町担当者、東北電力株式会社山形支店電力流通本部土木部長、国土交通省山形河川国道事務所所長、山形県文化環境部部長、山形県村山総合支庁環境課担当者など42人（以上 敬称略・順不同）

（第三種郵便物認可） 第44703号 （2）

（2009年11月27日）

社会

最上川上流域をゴミ対策のモデル地域とし、ごみの発生抑制や美化運動などを進めようと、上流域の9市町などによる第1回検討会が24日、朝日町の創造館などで開かれた。関係者約40人が参加。同町の上郷ダムでごみの回収状況を見学した後、会場を創造館に移して、ごみの現状や対策について意見を交換した。

先日、最上川上流域に位置する朝日町の上郷ダムで、上流域の9市町などの関係者約40人が集まり、ダムに流入したごみの実態や回収状況を見学した。その目的は、ごみの発生を抑制して最上川をきれいにすることである。まず実態を把握して、それが可能な対策を講じていくという趣旨で、美しい山形・最上川フォーラムが呼び掛け。県民の母なる最上川は、下水道の普及などで水質は改善傾向にあるものの、河川あるいは河川敷にはまだまだたくさんのごみが投棄されている。捨てない・捨てさせない運動を県民挙げて取り組むための切掛けとして今回の呼び掛けに注目し、自発的な動きを期待した。

これまでも最上川をきれいにしようという取り組みは継続して行われてきた。「美しい山形・最上川フォーラム」などを発足して県民一斉に拾いや雑物の刈り払い

最上川

上流から

ごみ対策

9市町をモデル地域に

朝日町で 上郷ダム見学、意見交換

社説

ごみのない最上川に

県民の自発的動き期待

いなるを呼び掛け、実践してきた。ところが、こうした県民参加による取り組みが進められる一方で、投棄されたごみを回収する上郷ダムに、朝日町、川西町、白鷹町、高畠町、長井市、南陽市、米沢市、飯豊町の9市町がモデル地域に設定し、9市町で発生抑制に取り組む。その効果を検証していきたいという。対策案はそれぞれに最も効果的、あるいは最も取り組みやすい方法を検討してもらうことが基本だ。

とを基本に、アイデアも募る。一律や強制を排し、自由な発想、自発的な動きを促したいという。

今回の最上川フォーラムの提案は、あらかる団体（農協や土地改良区、労働組合、ボランティアなど）や企業、そして県民一人一人のアイデアと参加を求めている。自捨てないこと、捨てさせないことを求めている点に特色がある。上郷ダムに漂着したごみを見学する参加者たち

朝日町

山形新聞朝刊掲載記事左：平成21年11月25日、右：平成21年11月27日

活動の成果・波及効果

各流域の住民がお互いの河川情報を認識することによって、ごみが発生する場合のストーリーを考えられるようになり、少ない量のごみでも流れ着けば大量になり、海洋汚染や生態系への悪影響を及ぼすということなど、自然保護に対する意識が変わったという趣旨の意見が多く聴かれた。普段の生活に浸透しつつある活動は、今後も各地域で継続的に行っていく。継続している活動（水質調査、クリーンアップ活動他）について、最上川を美しい山形づくりのシンボルとした取り組みが認められ、水環境の保全・創造に関する社会・文化活動が顕著であるということで、2008年第43回日本水環境文化賞の表彰を受けた。

活動の今後の計画

水質調査、クリーンアップ活動は引き続き継続し、より多くの県民の参加とデータの発信を行っていく。

ゴミ発生源対策「捨てない・すてさせないin最上川」では、情報提供も行い、現実的に何が対策になり、かつ各地域が潤うかなど、事業としても取り組めるような内容をすすめていく。さらにゴミや水を対象とした作文・論文コンクールや不法投棄写真展など啓発活動にも取り組んでいきたい。

執筆者 平野 沢香 渡邊 陽子



美しい水辺づくり功労賞：水質調査を継続実施し、環境向上へ向けた活動などを実施している団体を表彰



ゴミ対策検討会



ゴミ対策見学会